

行政に携わる技術者としての住民への説明責任

みず たに かず ひこ
水谷 和彦*

1. はじめに

公務員生活を終えて1年が過ぎようとした頃、後輩から本誌への寄稿の依頼を受けた。

テーマが「後輩技術者に向けたメッセージ」と言うことで、どのようなメッセージが良いか悩んだが、私が36年間行政に携わった中で、最後まで自信を持つことが出来なかった「住民への説明責任」についての経験を書き綴ることで、皆様に考えていただける機会となればと思い、筆を執った。

社会資本整備を行う公務員は、事業実施に関する説明責任を果たすことは必須事項の一つであり、これは、高速道路整備のような大規模プロジェクト事業であっても、既設道路の側溝を更新するような小規模な事業であっても、説明対象者数の多い・少ない、また、説明する内容に違いこそあれ、その責任の重さには変わりがないものと思う。

また、私の経験では社会資本整備に対して全員が賛成していただけたことはほぼ皆無であり、「関係する住民全員から賛成をいただいたので、説明責任は果たした。」と言えることもほとんどないと思う。

そのため、「事業説明会を〇回実施したので、一定の説明責任は果たした。」との理由で、事業を進めたこともあったが、その中で「あの時こうしておけばもっと良かったのではないか。」と、今でも考えることがある。

以降の2つの経験を見ていただき、行政に携わる技術者としての説明責任を果たしていただくための一助となれば幸いである。

2. 初めての住民説明

この経験は、採用3年目に出張所の担当者として赴任した先で「行政に携わる技術者は、基準を覚えたり土木技術のスキルを身につけるだけではだめ。」と勉強をさせていただいた初めての住民説明であった。

1) 事業内容等

事業は中山間地の国道に歩道を新設するものであった。国道の集落に面する区間に歩道がなく、通学の小中学生が危険であるとの理由から歩道設置が地元住民から熱望されていた事業である。

設計説明、用地買収は私の赴任前に円滑に行われたと聞いていた。

2) 工事説明会の実施方法

工事は、農繁期に集落から国道への出入りを一部制限し、工事中は集約した出入口とする計画としていたため、説明は集落の全戸を対象に行う必要があった。そのため、出席者を確認する集団説明会と集団説明会欠席のご家庭及び国道に直接乗り入れをしているご家庭には個別訪問して説明するという2段階で実施した。

集団説明会、個別訪問による説明は大きな問題もなく進み、全戸への説明後に工事着手した。

3) 個別説明

採用3年目の私であったが個別説明も受け持たせてもらった。

集団説明会で先輩方の説明のやり方等をメモしたのを見ながら、平面図、縦断図、横断図、さらに、乗り入れ口における車両の軌跡図、また、道路構造令や規定集の抜粋等、準備万端（自分ではそう思っ

*元国土交通省 中部地方整備局 岐阜国道事務所長（道路部 道路情報管理官、地域道路調整官等を歴任）

ていた) 整えて個別説明に臨んだ。住民には用意した図面や規定集の抜粋等を見ていただきながら、どのような歩道になるのか、また、乗り入れ口の大きさには規定があること、及び、軌跡図をお示ししてご家庭が所有されている車両の出入りに問題がないこと、さらに、工事中の国道への乗り入れ方法を説明し、最後に「工事をしてもらって良い。」との返答をいただいた。

4) 問題の発生

工事が中盤にさしかかった頃、問題が発生した。現場の主任技術者から「乗り入れ口のガードレールや縁石を設置しようとしたところ、『乗り入れ口の幅を1m広くしてほしい。』と私が個別説明をしたご家庭から要望され、工事を一旦止めざるを得ない。」との連絡であった。

5) 対応

係長に問題発生 of 報告をしたところ、個別説明の議事録を見ながら私に2つ3つ質問をした後、「すぐにポールと巻き尺を持って、道路パトカーで説明に行くぞ、一緒に来るように。」と指示があった。

係長は現場に到着後、説明が不十分であったことをお詫びするとともに、幅を1m広くしたい理由を聞いた後にポールを使って乗り入れ口を現場に表示した。さらに、ご家族が使用している車より大きな道路パトカーを自ら運転して出入りの状況を住民に見ていただくとともに、ご家庭所有の車で出入りの体験もしていただいた。

その結果、設計通りに工事を継続させていただけることとなった。

6) 反省

係長は現場から出張所に戻る途中で、次のような話をしてくれた。

「議事録を見て、住民が不安を覚えているのではないかと思った。」

確かに君は設計図や規定を頭に入れ、さらに、集団説明会では先輩の説明のやり方をメモしていたことも知っている。よく勉強したとも思っている。

しかし、個別説明の議事録に残っていた住民の発言は『工事をしてもらって良い』の一言だけだった。

私(係長)が住民の方に1m広くしたい理由を伺ったら、『乗り入れ口の説明は図面を見せていただきながら十分聞かせていただいた。立て板に水の説明で若いのに感心した。しかし、後から考えると車の出入りが本当にスムーズに出来るか不安になった。そのため、さらに1m広げてもらえば大丈夫だと思った。』ということだった。

私(係長)は、住民の“腑に落ちる”説明をすることは本当に難しいことだと思う。自分が理解することの何倍も難しい。また、こちらの説明に対して相手が何を感じ、何を考えているかを伺うことも重要なことだと思う。ただし、これが出来るようになるには経験も必要だが、常に住民の立場にたって考える姿勢も必要だと思う。

こんな話は、個別説明に行く前にすべきだった。今日のことは私(係長)の部下指導に関する反省材料でもある。良い勉強をさせていただいた〇〇さんに2人とも感謝しよう。」

私は、個別説明を担当することが決まり「自分がいかにスムーズに説明が出来るか」ということに集中して準備し、さらに、説明後に工事着手の理解を得たことで満足し、最後まで相手の気持ちを考える余裕はなかった。

出張所に戻る車の中で係長が使った“腑に落ちる”という言葉は、説明責任を果たすうえでのキーワードとして今でも大切にしている。

3. 説明責任を果たすべき相手は?

この経験は、管理職となり、初めて説明会を仕切る立場で臨んだものである。今でも思い出す度に悔やまれることをしてしまった。何故そうなったのかを説明するため、言い訳のような前置きが長くなってしまふことをお許しいただきたい。

1) 事業内容等

事業は、大都市周辺部に自動車専用道路と一般道

の複断面道路を新設する事業であり、都市内の渋滞緩和はもとより、通過する地区の生活道路における交通安全確保など、大きな効果が期待できる事業である。

一方で、区画整理により道路用地が確保された後、長期間事業に着手できなかつたため、工事を実施する時点には道路予定地沿線に高層マンション等を含む住宅が整備されていた。

そのため、本道路の整備により沿道環境が悪化するのではないかと不安を抱く住民の一部（以降、「Aグループ」という）から「道路整備には賛成だが、より環境に優しい道路構造に変更してほしい。」旨の要望が出され、説明会は紛糾することも多い状況であった。

2) 工事説明会の実施方法

工事説明会は、学区単位で行う大規模な全体説明を実施した後に、町内会単位の小規模な個別説明を行うこととしていた。

説明会には、図面の他に道路と住宅との位置関係等を説明するための模型を用意し、さらに沿道環境対策については特に詳細な資料を用意して臨んだ。

3) 全体説明の状況

全体説明は学区単位で行い、多い時には100名以上の住民が出席していた。その中でAグループ（10名～20名程度）は全会場に出席され（当該学区以外の方でも「来場可」と案内）、質疑ではAグループからの質問がほとんどであり、「道路構造を変更する、または、質問の回答がすべて出来るまで工事着手は認められない。」との主張で説明会が時間切れ継続となる状況であった。

その学区単位の全体説明会継続中に私は赴任した。

4) 対応

前任者から全体説明の状況等について引き継ぎを受け、その重責に不安で一杯でしたが、この時も“腑に落ちる”という言葉を心の支えに説明会に臨んだ。

全体説明は半年以上に及び、説明会前夜には寝られない日もあった。しかし、Aグループの方の立場

に立てば、「道路が出来て便利になることは良いが、そのために環境が悪くなるのはいや。」という気持ちは理解できることであり、工事着手に対するご理解をいただけるようAグループ一人一人の目を見て、沿道環境対策に関する説明や質疑への応答を繰り返した。

そのような中、地元自治体の協力もあり、一部学区の全体説明で工事着手の了解を得ることができ、町内会単位の個別説明にも着手することができた。

5) 反省

全体説明での工事着手の了解を得て私は意気揚々と個別説明に臨んだ。

恥ずかしい話であるが、この時、お一人の住民から指摘されるまで、大きな間違いを犯していたことに全く気付いていなかった。その指摘が、「工事説明会への出席は今日で4回目だけど、初めて私の方を見て説明したね。」だ。

指摘のとおりである。前任者から引き継ぎを受けた時点で、私の頭にあったのは「Aグループの方の腑に落ちていただくにはどうするか？」だけであった。

説明責任を果たすべき相手を限定してしまい、全体説明は出席いただいた住民全員への説明責任を果たしたとは言い難いものだったのである。

4. おわりに

拙い文章で皆様の参考となったかどうか分からないが、行政に携わる技術者が担う住民説明の重要性は今後ますます高まるものと思う。

職員数が減少する中で、その重責を果たすことは大変なことだと思う。

取組みが進むBIM/CIMにより説明用ツールは充実し、VR・MR等の技術を用いた疑似体験等により、公共事業への理解を深めていただく方法も進化すると思う。若手技術者の皆様がそれらも有効に活用して説明責任を果たすことができるよう祈念し、私のメッセージとしたい。